

読書ノート

梅崎 修・池田心豪・藤本 真 編著

『労働・職場調査ガイドブック』

——多様な手法で探索する働く人たちの世界

富田 安信
(同志社大学社会学部教授)



●中央経済社
2019年12月刊
A5判 260頁
本体2700円+税

●うめざき・おさむ 法政大学キャリアデザイン学部教授
●いけだ・しんごう 労働政策研究・研修機構主任研究員
●ふじもと・まこと 労働政策研究・研修機構主任研究員

本書は、今、労働・職場調査の第一線で活躍している19人の研究者によって書かれている。彼らが本書を書いた目的は明白である。「おわりに」から彼らの思いを伝えよう。現在、働き方改革など、労働や職場をめぐる問題はさまざまな場面で議論されているが、職場を調査して情報を集める人たち（労働調査者）が少なくなっている。そのため、現状が正しく理解されずに個人的な思い込みに基づいて労働問題が語られることが多い。議論が現場と乖離したものになっている。一方で、学会で労働・職場調査の調査手法に関するレクチャーセッションを企画すると、予想をはるかに超える参加者があるなど、労働をテーマに論文を書きたい、労働・職場調査について知りたいという大学院生、若手研究者は多いという。

そうした大学院生、若手研究者が労働・職場調査を自らの研究手法にするのをためらう理由の1つが、どのように調査手法を身につけたらよいかかわからないことである。労働・職場調査に関する適当な教科書はなく、教科書があったとしても、教科書で勉強すれば調査ができるようになるものでもない。調査手法を身につける方法はまさにOJTである。労働・職場調査を研究手法とする教員のゼミに入ったり、そうした研究プロジェクトに参加する機会を得たりして、調査に同行しながら調査手法を実地に学んでいく。そのあとは、自ら調査の経験を積み重ねながら、必ずしも調査がうまくなるわけではないが、職場での仕事の仕組みがいかにかうまくできあがっているかに、そして、そうした仕事に携わる人々

の技能や人柄の素晴らしさに気づき、労働・職場調査が心底、面白いと思うようになる。

19人の研究者は、まだ労働・職場調査を経験していない大学院生や若手研究者にも、本書を通じて労働・職場調査の面白さを感じてもらい、一人でも多くの人に労働調査者の仲間に加わってほしいという願いを込めて本書を書いている。

労働をテーマに論文を書く大学院生や若手研究者は、それぞれの指導教員のもとで勉強してきており、調査手法についても指導教員が得意とする調査手法を使うことが多い。しかし、労働・職場調査には多様な調査手法がある。本書を読むとわかるように、新しい調査手法がどんどん生まれている。新しい調査手法を取り入れることで、自らの研究テーマの核心により迫ることができるかもしれない。あるいは、調査手法そのものの面白さが研究を進めることもあるだろう。

大学院生や若手研究者に、多様な調査手法があることを伝えるのも本書の目的の1つである。本書では、労働経済学、人的資源管理、産業社会学、産業・組織心理学など、さまざまな学問分野の研究者が、自らの学問分野の調査手法を紹介している。それぞれの章は、「調査・研究の考え方」「主な研究事例」「私の経験」という流れで書かれている。「調査・研究の考え方」では、自らの学問分野のアプローチの仕方と、そこで使われる調査手法の特徴について書かれている。「主な研究事例」では、その調査手法を使った代表的な研究事例が紹介されてい

る。私が労働・職場調査を始めたころ、1980年代、1990年代の労働・職場調査の研究事例も紹介されており、懐かしい。そして、「私の経験」では、著者自らが調査したときの苦労や喜びが書かれている。

私も学部で労働をテーマにした調査実習の授業を担当することがある。その授業で本書を使うとすると、学生が興味をもった調査手法について、その章

末の参考文献にある著者の研究成果を読ませて、その調査手法の面白さを感じさせたい。また、調査実習の授業では、学生たちが調査テーマを選ぶことから始まる。本書に目を通すことで、学生たちが考えているテーマが、この調査手法を使えば調査できるということに気づいて、調査テーマが決まるかもしれない。楽しい1冊である。